

沖縄／南島 Okinawa/Nansei Islands

屋良健一郎

キーワード：琉球王国、薩摩、薩南諸島、境界、海域史、交易、グスク、琉球文学、本土、沖縄戦

本稿に与えられたテーマは「沖縄／南島」である。「南島」の捉え方はいろいろあると思うが、ここでは南西諸島として捉え、十点の書籍を挙げた。1と2が主として薩南諸島、3から7が前近代の沖縄（琉球王国）、8から10が近代の沖縄に関する書籍である。「沖縄／南島」というテーマのもとには多くの島々、様々な学問領域が含まれるが、筆者の力不足から、専門とする歴史学（琉球史）の分野の本が多くなってしまったこと、沖縄島以外の島々に十分に目配りができなかったことをあらかじめ断っておきたい。なお、本稿で触れられなかった先島諸島（さきしま）に関する書籍としては、新城敏男『首里王府と八重山』（岩田書院、二〇一四）、玉木順彦（たまき じゅんげん）『近世先島の生活習俗』（ひるぎ社、一九九六）などがあることも付言しておきたい。

1 大林太良（たりにょう）ほか『海と列島文化5 隼人世界の島々』 （小学館、一九九〇）

本書は、薩摩・大隅（おおくみ）を中心とする南九州と薩南諸島に関する考古学・歴史学・民俗学の論文を収録したものである。薩南諸島は大隅半島の南に位置する種子島（たねがしま）から、沖縄島の北方に位置する与論島（よろん）までの島嶼の総称である。種子島・屋久島などを含む大隅諸島、奄美大島とその周辺の島々から成る奄美諸島、そして大隅諸島と奄美諸島の間に位置し、前近代には「七島」と呼ばれたトカラ列島、これら三島嶼群から構成されるが、本書では主に大隅諸島・トカラ列島の島々が扱われている。タイトルにもなっている「隼人世界」とい

うのはこれらの地域が、古代に隼人の影響を受けていたと考えられること、中央とは異なる独自の世界を形成していたことを重視した名称のようだ。

総論的な性格の大林太良「合流と境界の隼人世界の島々」は、大隅諸島やトカラ列島の島々が「九州本土と奄美・沖縄の間にはさまれた関心の谷間」にあたっているとし（九頁）、これらの島々に対して日本人が持つているイメージの貧弱さを指摘した上で、島々の持つ歴史・文化の豊かさを説く。大林はこれらの島々の特徴を六つ挙げている。①民俗の境界線が認められること、②中央の統制のおよびにくい地域であつたこと、③島々の文化の違いも大きいこと、④海外との交渉が盛んであつたこと、⑤南九州本土と島々の関係が中央と辺境の関係であること、⑥独自の社会組織の在り方を有していること、である。

①は、本土の文化と琉球文化の境界線が、トカラ列島と奄美諸島の間に存在することを指す。本土と琉球との文化的な境界、あるいは両者の移行地帯的な性格をトカラ列島がもっていることは、本書所収の下野敏見^{しものとしみ}「トカラ列島の民俗文化」において農具や行事、信仰といった観点から考察が深められている。トカラ列島は歴史的にも中世には日本（薩摩）と琉球の狭間にあつてそれらに両属、あるいは両者を結びつける役割を果たしていた。民俗学上の境界は、トカラ列島の歴史を考える上でも示唆的である。③に関していうと、

種子島の浦では、ベンザシという役割の人物が日蓮真筆といわれる「御曼荼羅」を引き継いでいたという事例が興味深い（川崎晃稔^{あきとし}「種子島の漁撈習俗と飛魚漁」）。室町時代に法華宗に改宗して以来、これを深く信仰してきた種子島ならではの習俗であろう。また、向山勝貞「仮面と神々」は島々の行事で使用される仮面の類似性と相違点を述べ、さらにはそれらの仮面の本質を解き明かそうとしていて読み応えがある。④については、増田勝機^{かつき}「中世薩摩の海外交渉」、徳永^{とくなが}和喜「島津氏の南島通交貿易史」が南九州および薩南諸島と中国・朝鮮・琉球などとの関係史を述べており、中央から見ると辺境に思える地域が実は海外との窓口であつたことを改めて感じさせてくれる。⑤に関しては、島津氏が始祖の忠久を源頼朝^{ちかひさ}の落胤^{らくいん}としていたのに対し、薩南諸島では島主や有力者がルーツを平家の落人^{おちうど}に求めるケースが多いことに大林は着目し、「本土―中心―源氏」と「離島―辺境―平氏」という対照的な構図を見出している。非常に興味深いこの指摘は、さらに沖縄島の源為朝伝承、奄美諸島や先島の平家落人伝説を加えることで、南西諸島の人々の意識を考える上での論点となりそうである。

本書所収の各論文は、日本と琉球の間として両者から影響を受けつつ、独自の文化を育んだ薩南諸島の島々の個性と、外の世界とのつながりの豊かさを教えてくれる。薩南諸島をめぐる研究状況を概観することができ、また、島々の歴史・文化を様々な角度からと

りあげていて、今後の研究にも示唆的である。

2 池田榮史編『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』（高志書院、二〇〇八）

二〇〇二年度から喜界島（鹿児島県）の遺跡の発掘調査が開始され、そこで確認された遺構・遺物は南西諸島の考古学・歴史学に大きな影響を与えるものとして注目を集めている。九世紀から十五世紀（最盛期は十一世紀後半から十二世紀後半）の集落遺跡、城久遺跡群である。二〇一七年六月には同遺跡を「城久遺跡」の名称で国指定史跡にするよう文化審議会から文部科学相に答申された。

その城久遺跡群の発掘調査に関連して二〇〇七年に奄美大島・喜界島で行われたシンポジウム「古代・中世の境界領域——キカイガシマの位置付けをめぐって」の成果を踏まえ、刊行されたのが本書である。歴史学・考古学の十二本の論文を収録している。

澄田直敏・野崎拓司「喜界島城久遺跡群」は遺跡群に含まれる八つの遺跡について、二〇〇七年九月までの発掘調査の成果を紹介する。遺構としては、大型の掘立柱建物跡とその周囲の規格性の高い建物群、まとまった鍛冶炉跡の存在が特徴として挙げられている。また、土師器や須恵器、滑石製石鍋といった日本本土産遺物や青磁

など大陸系の遺物の割合が大きく、対照的に奄美諸島の在地土器である兼久式土器の出土がきわめて少ないことから、この海域における喜界島の特殊性が示唆されている。

鈴木靖民「喜界島城久遺跡群と古代南島社会」は、古代の文献から「南島」の歴史をたどった上で、発掘成果をもとに喜界島の位置づけを試みる。喜界島には、大宰府官人や九州の在地勢力が駐在し、はじめは律令国家への南島の朝貢を促す役割を、のちには交易を掌握する役割を果たしたのではないかと考察する。一方で、奄美大島は夜光貝の出土状況などから、朝貢品・特産物の生産地、供給源だったと推測し、喜界島とは異なる役割を見る。南島の古代社会をめぐる議論の流れも整理されていて先行研究も広く見渡せるようになっていく論文である。

永山修一「文献から見たキカイガシマ」は、古代・中世史料の記述を通して、当初はキカイガシマが大宰府の影響下にあったものの、やがて時代と共にキカイガシマに対する認識が境界、境外、異国と移りゆくことから、日本の国家体制の「内」から「外」へ変化していったと想定する。さらに、城久遺跡群の発掘成果を踏まえて、大宰府の出入機関が置かれた島が喜界島である可能性を指摘していて興味深い。

村井章介「中世日本と古琉球のはざま」は、中世の薩南諸島の実態に日本側の視線、琉球側からの視線、双方から迫っている点に特

色がある。『千竈文書』などを手掛かりに、南九州の武士が奄美諸島までを自身の所領と捉えていたと指摘する。一方、十六世紀の琉球が、種子島の領主であり、その周辺の島々にも影響力を持っていた種子島氏を主従関係の論理で捉えていたと述べる。この琉球側の視線については、二〇一一年に発表した「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」（『日本中世境界史論』岩波書店、二〇一三）の中で本格的に展開され、琉球史研究にインパクトを与えるものとなる。

文献と発掘成果の双方から、喜界島およびそれを含む奄美諸島が、日本・琉球の境界領域というユニークな性格を持つことが明らかにされている。加えて、城久遺跡群の発見は、沖縄島における琉球王国誕生への歩みを考える上で奄美諸島を軽視できないことを示すことにもなった。

3 沖縄県今帰仁村教育委員会編『グスク文化を考える——世界遺産国際シンポジウム（東アジアの城郭遺跡を比較して）の記録』（新人物往来社、二〇〇四）

琉球文化圏には、グスクと呼ばれる遺跡が存在している。その性格をめぐって、要塞、集落、聖域などといった観点から多くの議論が交わされてきた。「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」が世界遺

産に登録されたことで、沖縄県外での知名度も高まった。本書は二〇〇四年に行われたシンポジウム「グスク文化を考える——東アジアの城郭遺跡を比較して」の内容と、グスクに関する論文・コラムを収録したものである。県内外の考古学者や県内各地域の文化財担当者・学芸員などが執筆を担当しており、グスクの調査・研究の最新成果や県内の様々な遺跡の概要を知ることができる。内容は沖縄島北部の今帰仁グスクに関わるものを中心としながらも、奄美や先島諸島に関する論考も収録しており、広くグスク研究の現状を知り、これからの考える上で有用な一冊であろう。

シンポジウムに関する論文としては、千田嘉博「日本列島の中のグスク」が虎口（城の出入口）・城郭構造の視点から日本本土の城と沖縄のグスクを比較していて興味深い。本土の城郭では外柵形の虎口が十六世紀後半以降に見られるが、定期的にそれより早い糸数グスクにも外柵形虎口と同様の機能を持つ出入口が見られること、同グスクの構造に東アジアやヨーロッパの城郭と共通する点が見られることを指摘し、日本列島の中だけではなく、世界史的な視点で城郭を捉える必要があると述べる。また、本丸と他の曲輪との関係性から、日本の中世城郭は求心的な城（本丸を最も重要な空間として、階層的な構造をしている）と、並立的な城（本丸と他の曲輪の関係に階層性がない）とに分けられること、それを踏まえて見ていくと沖縄では前者に首里城が、後者に今帰仁グスクや中城グスクが該当す

ることを指摘する。他にシンポジウム関連では、古代・中世の東アジアの城郭（田村晃二）、中国の城郭都市（愛宕元）、グスク研究史（名嘉正八郎）に関する論考も収録されている。これからグスクを考える上での多様な視角を提言し、今後のグスク研究の深化を期待させる内容と言えよう。

その他にも興味深い論文が多い。玉城寿「民俗祭祀からみたグスク——今帰仁グスクを中心に——」は、グスク内部に存在する聖域・拝所が周辺集落の祭祀の舞台となつていることを押さえ、グスクが現代に息づく文化財であることを述べている。石野裕子「今帰仁グスクが抱えたムラ——今帰仁ムラ・親泊ムラ・志慶真ムラの移動について」は、かつて今帰仁グスク周辺に存在したムラ（集落）の移動の時期と背景を考察する。近世史料のわずかな記述をもとに、現在残っている地名や伝承を援用しながら人々の動きに迫っている。

中山清美「奄美・赤木名グスクの時代背景」は、貝製品やカムイヤキの出土状況、奄美のグスクの発掘成果などを紹介し、中国大陸との交易を担った拠点が奄美に存在していた可能性、その勢力が沖縄島を中心とする国家形成に影響を与えた可能性に言及している。本書刊行後、喜界島の城久遺跡群の調査が進むにつれて、古代から中世初期の南島における喜界島やこれを含む奄美諸島の影響力の強さが明らかになりつつある。

日本や他の東アジア各国の城郭研究の成果を踏まえてグスクを見

つめ直すこと、グスクそのものだけではなく周辺の集落も視野におさめること、沖縄島だけではなく奄美の存在をもう一度捉え直すこと、様々な重要な視点を提示した一冊である。

4 高良倉吉『琉球王国の構造』（吉川弘文館、一九八七）

沖縄の歴史を研究する際に直面する困難は、琉球王国時代、とりわけ古琉球（十二世紀頃から一六〇九年の島津氏の侵攻まで）の時代の史料が少ないことである。そのため、古琉球期の歴史を知るためには、日本や中国・朝鮮などの史料の中の琉球に関する記述、それらの国々との外交文書、近世に琉球で編纂された正史や家譜が主として参照されてきた。しかし、正史や家譜は後世の編纂物であるがゆえにそこから抽出できる情報には限界がある。また、アジア諸国との交易に関する史料は、琉球の海外貿易・対外関係の研究を深化させたが、古琉球の王国内部の状況に関しては充分には教えてくれない。

そのような中、「辞令書」を駆使して王国の諸制度を明らかにしたのが高良倉吉『琉球王国の構造』である。ここで言う辞令書とは、官人を任命する際や得分（とくぶん）を給与する際に国王が臣下に対して与えた古文書である。十六世紀から王国が消滅する十九世紀後半まで発給

された。伊波普猷や東恩納寛惇を始めとする近代の人々も研究の中で辞令書を用いていたが、本格的な分析までは行われていなかった。「古琉球研究のための第一級の史料」として辞令書的重要性を安良城盛昭が指摘（『新・沖縄史論』沖縄タイムス社、一九八〇年、三九頁）、高良も辞令書研究を展開していった。

この『琉球王国の構造』では、辞令書の様式について考察を加えた後、辞令書に記された内容の分析を通して、古琉球期の王府が三人の大臣（三司官）のもとで「こおり」と「ひき」という組織に編成されていたことが明らかにされる。その組織が海船の航海体制をモデルに編成されていた可能性も指摘されており、琉球の支配体制の特色を感じさせる。さらに、金石文や近世史料も用いて、官人の階層や得分、地方役人やノロ（神女）の実態、耕地の種別、離島支配の在り方なども考察の対象とする。辞令書には簡潔な記述のものも多いのだが、その簡潔な記述にこだわることで、また、何通もの辞令書を広く見渡すことで次々と王国の構造が明らかになってゆく。残存史料が限られている中での、同時代史料をメインに用いた実証的な展開が読者を惹きつける。

ところで本書の中では、民俗学者の仲松弥秀の琉球王国否定論（古琉球は独自の国家ではなく日本の一部とする考え）に批判を加えている。現在の研究状況では自明に思える琉球王国の存在を否定する説がかつて存在したことを知ると、古琉球が日本とは別個の国家で

あったことを様々な面から教えてくれる辞令書の史料価値と、その史料から多くの史実を導き、王国の姿を堂々と描き出した高良の研究の大きさに改めて気付かされる。

辞令書を活用した研究として矢野美沙子「辞令書から見る古琉球社会」（『古琉球期首里王府の研究』校倉書房、二〇一四）などがあるものの、辞令書はまだ多くの研究者に十分に駆使されているとは言えない。「辞令書」という名称の是非も含め、古文書学の観点から研究も、今後深められるべきテーマの一つであろう。

5 上里隆史『海の王国・琉球——「海域アジア」屈指の 交易国家の実像』（洋泉社、二〇一二）

一般書として記された本書は、先行研究の成果を広く踏まえつつ、著者自身のこれまでの研究も取り入れており、古琉球の歴史研究の最前線へと読者を誘う。

著者の上里隆史は「従来の歴史は陸上メインの歴史であり、海は外の世界を隔てる「壁」として、顧みられてこなかった」（一八頁）という問題意識に立ち、「王国の支配とは実に船によつてつながる海上ネットワークの支配であり、陸上視点の国家観ではその実態を充分把握できない」（二〇頁）と指摘する。国境という線や国家権

力同士の外交といったものにしばらくは、海上を往来する民間の動きにも注目し、陸と海双方の動向を視野に入れた歴史の見方として近年注目を集めている「海域史」——その海域史の視点から古琉球の歴史を描いたのが本書である。

特に印象的なのは那覇に関する記述である。琉球王国が首里城を王城とし、その外港として那覇が機能することで、海外貿易で繁栄したことはよく知られている。本書ではさらに踏み込んで、那覇が発展した背景や、古琉球期の那覇の様子について考察を深めている。島の周囲にサンゴ礁が発達している沖縄島では、前近代には大型船が入港・停泊可能な港が極めて限定されていたこと、その限られた港の中で外来者が滞在する十分な面積を持っていたのは那覇のみであったことを指摘する。十四世紀中頃から日本・中国間を往来する民間商船が南西諸島を航路とするという動きの中で、那覇が発展していったであろうと述べる。また、那覇には従来よく知られていた華人居留地（久米村）のほかに、倭人居留地も存在していたことも明らかにされた。当時の琉球にとって「異国」であった日本から来た人々が多く住み、禅宗寺院や権現社といった日本の宗教施設が存在する那覇は、まさに国際都市であった。そして那覇に居留する華人・倭人ら外来勢力を外交使節や通訳として活用することで、琉球は円滑な海外貿易、対日外交を展開していったのである。琉球王国の形成・展開を考える上での那覇の重要性を、そして、海を越えて

やって来た人たちの秘めた力と、陸に存在する王権との関わり合いで展開される歴史のダイナミズムを本書は教えてくれる。

これまでの研究は、ともすると王府主導の海外貿易・対外交流が描かれがちであったが、海を越えた人々の動きに着目した本書によつて、琉球の貿易を支えた人々の存在がクローズアップされ、外来勢力を活用する古琉球という国家の在り方がより鮮明に見えてきた。琉球王国の発展は、王府や地元民だけで実現されたものではなかった。そのことは琉球の歴史や文化を考える上で非常に重要な視点であると思われる。

6 豊見山^{とみやま}和行『琉球王国の外交と王権』

（吉川弘文館、二〇〇四）

琉球王国の歴史は一六〇九年に大きな曲がり角を迎える。島津氏の侵攻を受け、薩摩の支配下に入ったのである。以後、一八七九年に琉球王国が沖縄県として日本国の一部になるまで間の時期を近世琉球と呼ぶ。この近世期の琉球王国の位置づけについては、薩摩の傀儡^{かいらい}政権とする見解が根強く存在し、また、薩摩藩の側から琉球支配^あの在り方を検討するという研究が少なかつた。そのような状況下、近世の琉球がどのような国家だったのかを、琉球の「主体

性」に着目しながら考察するのが本書である。琉球の政治と外交に関わる様々な事項を具体的に検討する中で、本書は次のような点を明らかにしている。

近世琉球では、島津氏による裁判権への介入は見られたものの、刑罰を執行する権限は琉球が保持していた。また、琉球は年貢や海船をめぐる薩摩との交渉で、ある程度は自国に有利な成果を挙げている。なお、薩摩との交渉の中では、中国との冊封関係を持ち出すことがあった。さらに、琉球は自国への中国漂着民を（幕府の規定に則つて長崎へ送還するのではなく）直接送還すること、中国への朝貢品を変更すること、といった事項を、薩摩の許可を得る以前に独断で決定したこともあった。以上のことは、琉球が政治的主体性を発揮していたこと、その際に冊封関係が重要な役割を果たしていたことを示している。従来、琉球は朝貢貿易という経済的利益のみから冊封関係を続けていたとも考えられていたが、それだけではなく近世琉球という国家を維持する上でも冊封が大きな意味を持っていたことを、本書は教えてくれる。著者も指摘するように、これまでの研究では琉球と日本の関係、琉球と中国の関係のどちらかに傾斜したものが多かった。しかし、本書はそれを同時に視野に入れたことが特色である。著者は、日本と中国に「両属」していた国としてではなく、「従属的「重朝貢国」」という概念で近世琉球を捉えることを提唱する。

本書の「序」では先行研究の成果と課題が明快に整理されており、琉球史研究の歩みを知る上で有益である。近年、琉球の「主体性」を追究する研究、琉日関係・琉中関係を統合的に考える研究が見られるようになってきたが、その動きを牽引したものとして本書は注目される。そのような研究動向の中、渡辺美季『近世琉球と中日関係』（吉川弘文館、二〇一二）、紙屋敦之『東アジアのなかの琉球と薩摩藩』（校倉書房、二〇一三）といった研究成果も出ている。渡辺の著書では、中国と日本の「狭間」の国として中日の関係性を活用することで存続したことを、近世琉球という国家の特質として指摘している。

7 『池宮正治著作選集』（全三巻、笠間書院、二〇一五）

一九七〇年代・八〇年代に伊波普猷・東恩納寛惇・仲原善忠（ぜんちゅう）をはじめとして、沖縄研究をリードした先人たちの全集・著作集が相次いで出版され、それらは現在、沖縄を知る上での必読書となっている。そういった中に新たに必読書として加えたいのが、この『池宮正治著作選集』である。池宮正治は、琉球大学教授として長く琉球文学研究を牽引し、定年退職後も研究会への参加などを通して後進に示唆を与え続けている。池宮の研究を踏まえ、琉球文学研究を深

化させている小峯和明と島村幸一の尽力によって出版されたこの著作選集三冊には、それぞれ第一巻『琉球文学総論』、第二巻『琉球芸能総論』、第三巻『琉球史文化論』というタイトルがついており、一九七〇年から二〇一〇年までに発表された六十三編の論考と二編のエッセイが収録されている。

池宮は「琉球文学総論」（一九九六年）において、琉球文学は琉球語による表現を軸とするとした上で、①古謡、②物語歌謡、③短詞形歌謡、④劇文学を中心とし、その外縁に⑤和文学、⑥漢文学、⑦沖縄文学（明治時代以降の共通語による文学）が存在するとジャンル分けした（第一巻、五頁）。①には古琉球期の歌謡である「おもろ」、③には八八八六の三十音で作られる琉歌、④には沖縄の伝統芸能として知られる組踊などがそれぞれ含まれる。これらのうちで琉球文学研究の中心となるものは、やはり十六世紀から十七世紀にかけて編まれた歌謡集『おもろさうし』である。『おもろさうし』にあらわれた異国と異域」（二〇〇三年）は、おもろに異国・異域がどう詠まれているのかを概観したユニークな論文であるが、従来はカラパ（ジャカルタの古名）と考えられていた「かわら」を「から」（韓）すなわち朝鮮のことではないかと推論するなど新たな見解を打ち出している（第一巻、二二八頁）。また、「王と王権の周辺——『おもろさうし』にみる」（一九九一年）の中でも、古琉球辞令書の文言に對して高良倉吉とは異なる独自の見解を提示している（第一巻、

二〇二頁）。おもろの分析を通じて古琉球の王権や社会に迫る池宮の研究は、沖縄の歴史学研究にも刺激を与えるものである。

第二巻は組踊を中心に、琉球舞踊、三線、エイサー、さらには近代演劇にいたるまで様々な芸能に関わる論考を収録している。第三巻には王府の儀礼に関する論文も少なくないが、注目したいのは和文学、すなわち近世琉球の官人が日本の言葉で記した作品に関する論文である。琉球語で表現された作品を主な研究対象とする琉球文学研究では、ともすると和文学にはスポットが当たりにくいのだが、それを切り拓いたのが池宮の研究であつた。琉球の人々が記した和歌や日本語の文章を研究対象とすることで、日本の文芸を受容する琉球の官人の姿、その指導にあたつた薩摩の人々の存在が浮かび上がり、公的な文書や家譜からは見えてこない琉球と日本・薩摩との交流の一面が示されたのである。

三冊の著作選集を前にと、池宮の研究というのが「琉球文学総論」で示された琉球文学のジャンルのほとんどをカバーするものだということが分かる。古琉球のおもろから近代芸能まで、ジャンルも時代も超越したその研究の幅広さは、読む者に琉球文学の世界の豊かさを示してくれる。そして、琉球・沖縄をめぐる研究が細分化する中で、広い視野を持つことの大切さを教えてくれるように思う。

8 仲程昌徳なかほどまさのり『沖繩の投稿者たち——沖繩近代文学資料発掘』(ポーターインク、二〇一六)

本書は明治・大正期の雑誌に見られる沖繩の人々の短歌・俳句・詩を紹介したものである。対象となっている雑誌は『文庫』『明星』『創作』『スバル』『文章世界』『ホトトギス』『趣味』である。

仲程昌徳は沖繩の近代文学研究をリードしてきた研究者である。多くの単著があり、本書が同氏の代表的な著書とは決して言えないであろう。なぜなら、本書は雑誌に掲載された作品を列挙することに主眼が置かれていて、その作品や作者、雑誌に関する著者自身の分析は、要点のみを述べた簡潔な記述に留まっているからである。資料集としての性格が強いと言えよう。それでも「必読書」として挙げたいのは、本書にこそ仲程のこれまでの研究に対する姿勢、そしてこれからの沖繩文学研究に望むことが示されていると考えるからだ。

「あとがき」には、「若い研究者に、大切な時間を、同じような資料集めにこれ以上浪費させたくない」、「それぞれの雑誌について再調査する必要があるかと思ひながら、(中略)することができなかった。これからできるかといえば、とてもできるとは思えない。あとは、若い研究者にまかせるしかない。」、「研究者が多くなつてほしいと

願う事切なるものがある。」といった言葉が見える。

周知のように、沖繩戦は多くの資料を奪った。それゆえ、前近代はもとより、近代の文学史を明らかにすることも困難であつた。そのことは、かつて仲程が大正期の短歌の研究の困難さを「闇の中の沖繩短歌史」(『琉書探求』新泉社、一九九〇)と表現したことに如実に表われていよう。近代文学研究を進めるにあたり、仲程は県内外・国内外に残る沖繩関係の資料を博捜することの必要性を感じ、そのことに多くの歳月を費やしたはずである。そして、本書のように手に取りやすい形で、後進のために出版したのだ。本書以外にも、仲程の著書にはこのような資料集的な性格の強いものが少なくない。それらは、彼が後進に託したバトンであり、闇の中を照らす火である。仲程から受け取った火で、近代文学史を覆っている闇をどれだけ照らすことができるのか、時間をかけて収集した資料を惜しみなく読者に差し出す本書を前に、沖繩文学研究のこれからを考えさせられるのである。

9 伊佐眞一『伊波普猷批判序説』(影書房、二〇〇七)

伊波普猷(一八七六年―一九四七年)は近代沖繩を代表する知識人で、「沖繩学の父」と呼ばれる。文学、歴史、民俗といった幅広い

視野での沖縄研究は後進に大きな影響を与え続けている。また、彼の学問からは沖縄への深い愛情が感じられて、聖人君子としての伊波像を抱く人も少なくないであろう。その彼の思想と人々の伊波像に対する批判の書である。

『東京新聞』一九四五年四月三日・四日に掲載された伊波普猷の「決戦場・沖縄本島」という文章を見つけたことが、伊佐眞一が本書を執筆するきっかけとなったという。「決戦場・沖縄本島」で、アメリカ軍の沖縄上陸を知った伊波は、沖縄の人々が日本人としての「真価を発揮する機会が到来した」と捉え、「皇国民としての自覚」に立った戦いへの期待を記している。戦時下において知識人がこのような文章を書くこと自体は決して珍しくはないが、伊波の場合、戦時下でも時局に荷担しなかったという固定観念が伊波を論じる人々の間でも根強かったため、「決戦場・沖縄本島」の発見は衝撃的だったのである。そして従来の伊波像を批判した本書も大きな話題となった。

本書では、「決戦場・沖縄本島」を書くに到る伊波の学問・思想の軌跡が近代日本・沖縄の歩みと共に丁寧に執筆されている。伊波の研究の中身を論じるというよりは、時代との伊波の向き合い方を明らかにすることに主眼がある。伊波の多くの著述に目を通し、その文言にこだわった著者は、伊波の戦前・戦時下の認識が「反ファシズム・反戦に立脚したものではなく、実際はもつと体制ににじり

寄った政治的色彩を帯びた思想と行動だった」（一八三頁）と結論づける。そのような伊波の言動にもかかわらず、反戦の学者としてのイメージが強い背景として、戦後に伊波が行った戦争批判の印象の強さ、戦後の沖縄の人々の伊波への思い入れの深さなどを挙げている。

充実した註に基づく詳細な記述が圧巻で、自分の抱いている伊波普猷像が揺さぶられ、先入観を排して批判的な思考を持つことの大切さを教えてくれる書である。特に沖縄戦をめぐるのは、沖縄の人々は本土とは異なつて戦争責任を追究することをしなかった、ということがしばしば言われることを思うと、本書の刊行意義は大きいと思うのである。また、長文の「おわりに」と、政府や沖縄問題に無関心な人々への批判をふくむ「あとがき」を読んでいると、本書が単に伊波普猷という過去の人物を論じているのではなく、現代の沖縄・日本を取り巻く状況を考えるための一冊でもあることが感じ取られる。

伊佐眞一は、本書刊行後も伊波研究を深化させ続けている。

二〇一〇年には伊波普猷が東京帝国大学文科大学（現東京大学）に提出した卒業論文を発見したことが大きな話題となった。また、伊波の思想の形成過程を論じた『沖縄と日本の間——伊波普猷・帝大卒論への道』（全三巻、琉球新報社、二〇一六）は二〇一七年に「第四十四回伊波普猷賞」を受賞するなど、高い評価を得ている。『伊

波普猷批判序説』は、これから伊波普猷や沖繩学を研究対象としてゆく者にとつての必読書と言えるであろう。

10 岡本恵徳『現代沖繩の文学と思想』

(沖繩タイムス社、一九八一)

本書は、そのタイトルが示す通り、沖繩の文学と思想について扱った論文を収録したものである。二部構成で、文学を扱うⅠには「近代沖繩文学史論」「沖繩の戦後の文学」など四本の、思想を扱うⅡには「水平軸の発想——沖繩の「共同体意識」」「施政権返還」期の思想」など五本の論文を収める。

「沖繩の戦後の文学」では、一九四五年のアメリカによる占領から一九七二年の日本復帰までの戦後沖繩の歴史を確認した上で、社会の状況（アメリカによる統治）から大きな影響を受けた文学の歩みを叙述する。著者は戦後沖繩の文学活動を三つの時期に区分することを提唱し、それぞれの時期の特徴を考察している。戦後文学の出発となる第一期（一九四五年から一九五一年頃まで）は、戦前から活躍していた表現者たちが中心となつて文学活動が展開され、戦前の文学への批判や戦争体験の凝視といった営為がまだほとんど見られない時期。第二期（一九五二年頃から一九六一年頃まで）には、戦

後に登場した新人たちが活躍、文学の世代交替が起きて、新たな表現が模索される。それと共に米軍支配に抵抗する文学も見られるようになる時期である。第三期（一九六二年以降）には個人の内面を深化させる表現が増えると共に、方言や沖繩の民俗を表現しようとする試みが見られるようになるという。著者は、戦前の文学が中央（本土）との同質化を目指し、沖繩の独自性を表現することに乏しかったこと、戦後の第三期になつてそのようなこだわりから解放されて自由な表現が生まれたことを指摘する（二二六頁）。沖繩の人々が風土や言葉（方言）をどのように表現してきたのか（あるいはしなかったのか）という点は沖繩の文学の歴史を考える上で非常に重要で、これからも研究されるべきテーマであろう。

「水平軸の発想」は、近現代の沖繩の人々の思想に迫る論考である。本土を先進的と捉え「後進的な沖繩の風土や習俗、生活のありかたを否定して、中央と同質化することによつて」先進性を獲得しようとする考え方が、沖繩の人に広くあるのではないかという指摘（二〇七頁）、そのような考え方が山之口獺の詩「会話」の解釈にも影響を与えているのではないかという推論（二二七頁）が興味深い。また、沖繩戦下の渡嘉敷島で起きた「集団自決」について、先行する論客の見解を踏まえながら、自決の背景に「共同体」的なものを見出そうとする思考が印象的だ。本来であれば、共に生きる方向に働くはずの「共同体の生理」が、米軍の包囲による島の孤立、権力

の意志や戦争をあらがい難いものと捉える共同体成員の認識などから影響を受けることで、死を共に選ぶという方向に機能したのではないかと著者は述べる（二四二頁）。さらに、復帰運動の展開も「共同体的生理」から捉えることが可能であると著者は考えており、「共同体的生理」は「沖繩の歴史の中で、多くの沖繩の人たちを規制し、いまなお生き続けている」（二四六頁）とする。「共同体」を考えることを「沖繩の思想」を考えることになるのだと指摘している。この「水平軸の発想」は著者の代表的な論文であり、沖繩をめぐる研究が盛んになった二〇〇〇年代に改めて注目を集めた。

ところで、著者の文章には「沖繩に限らずどこにもあることなのかも知れないが」（八五頁）、「多分、それは沖繩に限らず「本土」の各地にみられるものであり」（二七五頁）といった表現がしばしば見られる。沖繩を絶対視するのではないこのような姿勢が、読者に信頼感を抱かせるように思う。